

# 道の駅とまちづくり

(一社)全国道の駅連絡会 事務局

## 1 道の駅の進化

道の駅は、道路利用者のための「休憩機能」、道路利用者や地域の人々のための「情報発信機能」、文化教養、観光レクリエーションなど地域振興を図る「地域連携機能」の三つの機能を併せ持つ複合的な休憩施設として、1993年2月に制度が創設された。

全国103カ所でスタートした道の駅は、2024年8月現在、1,221駅と10倍以上に増加しており、道の駅は身近な公共施設として、広く受け入れられる人気の施設に発展している(図1)。

多様な機能を持つ道の駅であるが、当初は休憩場所としての性格が強く、「通過する道路利用者へのサービス提供の場」であった。その後次第に沿道地域の文化、歴史、名所、特産物などを活用したり、魅力的なグルメや温浴施設を設置したりするなど、多様で個性豊かなサービスを提供する道の駅が増え、「道の駅自体が目的地」という姿に進化してきた。

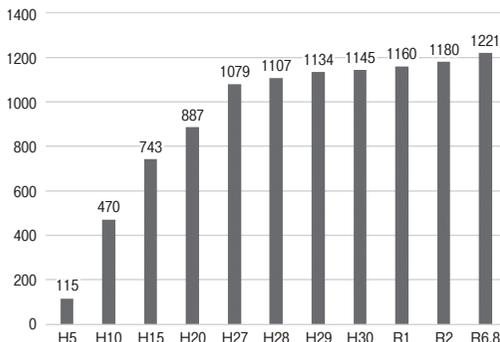


図1 「道の駅」登録数の推移

さらに、2020年からは「地方創生・観光を加速する拠点」として、まちと道の駅が一体的に、「まちぐるみ」の戦略的な運用でまちづくりを推進していく「道の駅」第3ステージの取組みがスタートしている。

本稿では、最近注目を集めている道の駅や、「道の駅」第3ステージについて記すとともに、全国道の駅連絡会の取組みを紹介していく。

## 2 注目される道の駅の事例

### 1) 道の駅「川場田園プラザ」

群馬県川場村は、2019年の調査で人口3,273人、古くから養蚕業や農林業が基幹産業となり村を支えてきた。村の入り口にある「川場田園プラザ」は、1996年に道の駅として登録された。川場村の村づくりの基本路線である「農業＋観光」の集大成として、川場村の地場産品の振興及び新規開発



写真1 道の駅川場田園プラザ

を担うとともに、川場村の商業・情報・ふれあいの核を形成することを目的としている。

広大な敷地の中には、直売所、レストラン、カフェ、観光情報センターなどが設けられており、訪れる人々が地域の特産品を手軽に購入し、地元の食文化を体験できるようになっている。

施設内にあるファーマーズマーケット(農産物直売所)では、地元で収穫された新鮮な野菜・果物や加工品が並んでおり、川場産コシヒカリ「雪ほたか」や季節の野菜、フルーツは高い人気を誇っている。

毎朝、農家が直接持ち込む新鮮な食材が並び、旬の味覚を楽しめる。また、「雪ほたか」を活用した甘酒を始め、地元の素材を活かした新しい加工品の製造や、農産物の新品種にも取り組んでいる。

地元食材を使用したレストランやカフェ、ミートやパン、ビール、チーズなど製造工房と販売所、日帰り温泉施設なども設けている。



写真2 ファーマーズマーケット(農産直売所)



写真3 川場産生乳を使用したヨーグルト

年間180万人が訪れるなど、年齢を問わず1日中楽しめる田園行楽地として人気の道の駅となっている。

## 2) 道の駅「もてぎ」

茂木町は、かつてたばこ産業で栄え、約30,000人程度の人口を有していたが、2024年7月1日現在、人口10,900人で、人口減少と過疎化が進んでいる地域である。

茂木町では、1986年8月に発生した台風10号により、町内を縦断する一級河川「逆川」<sup>さかがわ</sup>が氾濫し、町の市街部が壊滅的な被害を受けた。国から激甚災害の指定を受けて、大規模な河川改修などを実施したが、この改修工事により広大な余剰地が生まれ、これを利用して1996年7月、道の駅「もてぎ」が建設された。オープン当初の年間来場者は32万人であったが、今では160万人以上が訪れる



写真4 道の駅もてぎ



写真5 野菜直売所

茂木町を代表する施設の一つとなっている。

道の駅「もてぎ」の野菜直売所で取り扱っている野菜や果物は、町内で集められた「落ち葉」「おが粉」「もみ殻」「牛糞」「家庭から出る生ゴミ」を完全発酵させた有機たい肥である「美土里たい肥」を使用して育てられている(図2)。

また茂木町では、2012年に町の特産物であるゆず、いちご、ブルーベリー、梅、えごま等の加工所として、茂木町特産品加工所(通称「もてぎ手づくり工房」)を整備し、その運営を道の駅「もてぎ」が行っている。6次産業化推進のため、町内農家が生産した農産物を買取り、手づくり工房で加工し、道の駅で販売を行っている。道の駅で農産物全量を高い価格で買い取ることで、生産者の収入増に寄与するだけでなく、新規就農者の参入や耕作放棄地解消にもつながっている。

このほか、町内農家だけでは生産をカバーしきれない「シャインマスカット」「サツマイモ」「スイカ」「原木マイタケ」などの農産物については、自ら町内の6haの耕作放棄地を開墾して自社農場を立ち上げ、栽培やニーズの高い加工品の生産を行っている。



おとめミルクアイス

ゆず塩ら〜めん

写真6 町の特産物を加工した商品

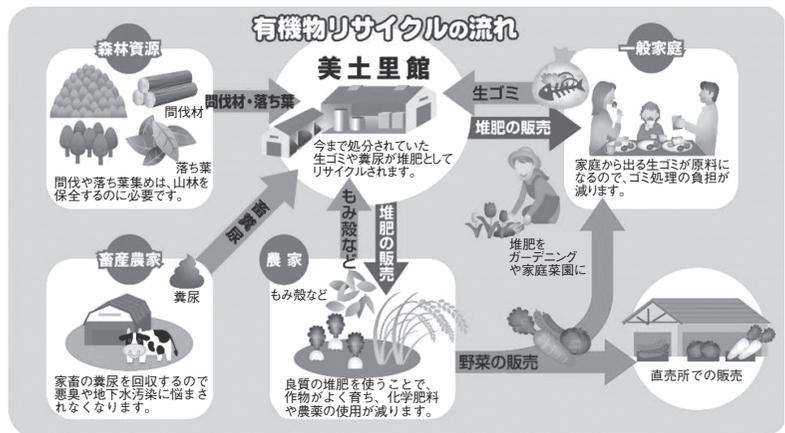


図2 美土里たい肥が作られるまでの流れ

さらに、大規模災害時の防災拠点として、災害時に停電しても使用できる防災トイレや太陽光発電機、蓄電池を整備し、2013年には災害時の拠点となる「茂木町防災館」を建設し、避難所、備蓄倉庫なども整備している。

2022年8月には「道の駅」第3ステージ」のモデルプロジェクトの一つとして選定され、「道の駅を核とした地域の発展」「道の駅の持続可能な安定運営」を目指す取組みを進めている。

### 3 「道の駅」第3ステージ

「道の駅」第3ステージとは、道の駅が「地方創生・観光を加速する拠点」となり、「ネットワーク化で活力ある地域デザインにも貢献」する



写真7 茂木町防災館

ことを目指して2020年より進められているものである。その後のコロナ流行や能登半島地震などを含め、様々な社会情勢の変化や、国土形成に関する新たな方向性等を踏まえ、2024年7月に中間レビューが行われたところである。

冒頭で述べた、道の駅が「通過する道路利用者へのサービス提供の場」である段階を「第1ステージ」、「道の駅自体が目的地」となるようになって「第2ステージ」、そして現在は上記の「第3ステージ」の取組みが始まっている。

「第2ステージでも地方創生に寄与している事例があるのでは？」との疑問に答えるため、第2ステージが「道の駅の発展を目指し、結果として地方創生につながっているケースがある」のに対し、第3ステージは「着想の時点よりまちの発展を主眼とし、「まち」と「道の駅」が一体となって意志と戦略を持ち、地方創生・観光や防災の取り組みを進めるもの」と整理されている。そして第3ステージの姿として新たに「道の駅」単体からまちぐるみの戦略的な取組へ」が掲げられた(図3)。

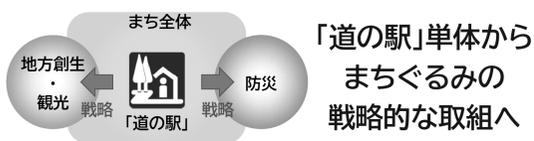


図3 第3ステージの姿

前述のように、道の駅「もてぎ」は、「道の駅」第3ステージを体現するモデルプロジェクトに指定されている。その中で例えば、道の駅スタッフと町役場職員や地元高校生徒との議論を通じ、「町への移住相談窓口を役場ではなく「道の駅」に設置する」というアイデアを生み出したり、まちと道の駅が共同で「しあわせの、自給自足。」というコンセプトを掲げたりするなどの取組みが進められている。今後のリニューアルでは道の駅の中心にまちの魅力を発信する場を設置する検討がな

されるなど、道の駅だけに閉じない、まさに「まちぐるみ」の取組みが進められている。

#### 4 全国道の駅連絡会について

中間レビューでは、「道の駅」第3ステージの実現に取り組む自治体と「道の駅」に対して、関係省庁一丸での伴走型による集中的な支援を推進するための新たな枠組みとして「(仮称)「道の駅」第3ステージ応援パッケージ」が提示された。その中で、「全国道の駅連絡会の支援」が位置づけられ、その体制強化も推進すべきとされている。

2012年に任意団体としてスタートした全国「道の駅」連絡会は、2019年に一般社団法人に移行し、全国組織としての機能強化、経営体制の透明化を図るとともに、民間を始めとする多様な主体との連携や、地域の活性化をもたらす仕組みを創造していくこととした。災害時を含めた道の駅ネットワーク機能の強化や多目的利用の支援、キャッシュレス決済導入など道の駅の経営機能強化支援、民間企業と連携して様々なアイデアを道の駅に展開することによる収益機能強化支援など、道の駅の活性化に取り組んでいる。

「道の駅」第3ステージにおいても、関係省庁が実施する支援と連携しつつ、「ワンストップ相談窓口」や必要に応じた「アドバイザー派遣」など、「まち」と「道の駅」が一体の「まちぐるみ」の取組みを支援していくこととしている。

#### (参考文献)

- 1) 『教科書「道の駅」』(2017)全国「道の駅」連絡会
- 2) 道の駅「川場田園プラザ」ホームページ
- 3) 『道路』2024年9月号(特集「道の駅」第3ステージの実践)、(公社)日本道路協会
- 4) 道の駅「もてぎ」ホームページ
- 5) 国土交通省「道の駅」第3ステージ推進委員会「道の駅」第3ステージ 中間レビューと今後の方向性」(2024年7月)